Satoumi（里海）は国際的にどのように捉えられているか？

松 田 治

NPO 法人 瀬戸内海研究会議

How *Satoumi* is grasped internationally?

OSAMU MATSUDA

NPO the Research Institute for the Seto Inland Sea, Kobe, Hyogo 651-0073, Japan

1. *Satoumi* は国際的にどのように表現されてきたか？

はじめに、*Satoumi* が国際社会でどのように表現されてきたのか、できるだけ生（なま）の表現を以下に紹介する。なお、*Satoumi* は Sato Umi, Sato-Umi などとも表記され、表示法が統一されていないが、本稿（本文中）では原記載にかかわらず *Satoumi* に統一する。

事例 1. *Satoumi* は “Symbiosis among human communities and coastal/marine areas— a more rational vision of co-existence” と表現された。これは、第 7 回 EMECS 会議（EMECS7, フランス, カーン市, 2006）の総括討論で、トルコの Ohzan 教授が「*Satoumi* は人間社会と沿岸海域の共生関係を示すもので、人と自然のより合理的な共存の未来像を示すもの」ととりまとめたものである。この「共存」は沿岸域の利用と保全の両立も意味している。

事例 2. EMECS conference will be remembered with the introduction of a new Japanese term into the international vocabulary. This term is *Satoumi* indicating the traditional approach of the Japanese people to the sea. これは、EMECS8（中国, 上海市, 2008）のセッション総括で Ohzan 教授が *Satoumi* に *Tsunami* や *Kuroshio* とならぶ国際用語としての評価を与えたものである。

事例 3. *Satoumi* places increased emphasis on promoting positive interaction between humankind and our enclosed coastal seas. That interaction can take many forms. It may be realized through concerted, continuous environmental conservation programs. 同じく EMECS8 では、最終日に採択された上海宣言に「*Satoumi* とは、人類と閉鎖性海域との間の建設的な相互作用の促進を強調する考え方」が盛り込まれた。

事例 4. *Satoumi* both as a concept and a management strategy provides a culturally-appropriate method for im-

plementing provision of the Convention on Biological Diversity (CBD) related to coastal areas. On a very basic level, *Satoumi* is an expression of the CBD ecosystem approach, which is considered the primary framework for action under the CBD. これは、Marjo Vierros (2011)¹⁾ が、*Satoumi* と生物多様性条約や ecosystem approach との親和性を述べたものである。

事例 5. The concept of *Satoyama*, long-standing traditions associated with land management practices that allows sustainable use of natural resources, has been extended to cover marine and coastal ecosystem—*Satoumi*. ここでは、*Satoumi* が *Satoyama* の概念を海洋や沿岸生態系に拡張した概念であると表現されている (2012)。²⁾

事例 6. *Satoumi* is a term for coastal areas which has a strong connection with people's livelihoods; an area where people lead their lives by acquiring the diverse riches of the sea. *Satoumi* is high in productivity and serves as habitat to an abundant ecosystem that provides an important place for sea creatures to spawn and raise their fries. 人間生活との関連性を強調するこの表現は、2011 年に石川県能登半島の Noto's *Satoyama* and *Satoumi* が FAO（国連食糧農業機関）の GIAHS（世界農業遺産）として認定された際の *Satoumi* の説明文である。

以上 6 つの表現事例から、国際的には *Satoumi* が人と沿岸域の関係性を中心にしてかなり“守備範囲”の広い概念や管理手法として表現されてきたことが分かる。また、*Satoumi* は単独ではなく *Satoyama* と対にして用いられることが少なくない点にも注意が必要である。つまり、国際的に *Satoumi* を論じるには *Satoyama* の基本的理解も必要である。

2. 定義論の周辺と包括的概念規定としての *Satoumi*

科学では一般に用語に厳密な定義が必要であるが、世

間一般に広く使われている言葉では必ずしもそうでなく、定義の不明確なものや定義のできないものも少なくない。しかし、だからといって厳密に定義できない言葉は意味がないとか役に立たない訳ではない。

世間一般で広く使われている言葉ではなくて、専門分野でもう少し限定的に用いられる言葉の定義はどうであろうか？ *Satoumi* にも関係の深い *responsible fisheries* (責任ある漁業) と *wise use* (賢明な利用) を取り上げてみたい。Responsible fisheries は FAO が提示している考え方であり、*wise use* は湿地保全を主目的とするラムサール条約の基本理念であるから、内容はともに国際的にもよく認知されており、むしろ時代の支持を集めている概念でもある。しかし、では「責任ある漁業」とは何か、「賢明な利用」とは何かを具体的に定義し、端的に表現することができるかというところではない。簡単にいえば、総論としての「責任ある漁業」や「賢明な利用」の具体的なあり方(各論)は時と場所、状況によって異なるのである。このように総論的な考え方を定義することを包括的概念規定と呼んでみたい。前項で示した *Satoumi* の国際的な取り上げられ方は、*Satoumi* がある種の包括的概念規定であることを示している。すなわち、*Satoumi* は定義論のレベルからすると *responsible fisheries* や *wise use* に近いということになる。

Satoumi を包括的概念規定と考えると、A 国の B 湾と C 国の D 浜の *Satoumi* には、総論的には共通性が認められても、具体的な表現形はそれぞれ異なるという状況は当然のこととなる。この観点からは、B 湾と D 浜の *Satoumi* の具体像が異なることは問題でなく、また、異なるからといってお互いに *Satoumi* として否定したり排除したりすべきものでないことも明らかである。

3. 国際会議と国際プロジェクトにおける *Satoumi* の位置づけ

ここでは、国際会議や国際的なプロジェクトの中で *Satoumi* がどのように位置づけられてきたのかを、筆者が参加した主な会議やプロジェクトについて紹介する。

EMECS 会議 EMECS は Environmental Management of Enclosed Coastal Seas の頭文字で、例えば EMECS9 は第9回世界閉鎖性海域環境保全会議を示す。EMECS7 (2006) では柳、松田から *Satoumi* の概念と実践例が報告され、英虞湾の *Satoumi* づくりについても複数の報告がなされたことが事例1をもたらしした。EMECS8 (2008) では *Satoumi* に特化した *Satoumi* Session が開催され、事例2、3の表現に結びついた。EMECS9 (2011年, USA, ボルチモア市) の *Satoumi* Session は *Satoumi* の考え方をさらに広める (disseminate) ことが大きな目的となり、チェサピーク湾と

瀬戸内海の比較も重要なテーマとなった。

PEMSEA 関連会議 PEMSEA (東アジア海域環境管理パートナーシップ) の主催する第3回 EAS-Congress (East Asian Seas Congress: 東アジア海域会議) が2009年にフィリピンのマニラ市で開かれた。この中の *Satoumi* Workshop のテーマは「生物生息地の保護と再生管理に向けた地域固有のアプローチ: *Satoumi* の経験と地域共同体主導の取組み」であった。*Satoumi* と ICM (Integrated Coastal Management) や CBM (Community Based Management) の関係性も重要なテーマとなった。筆者が議長を務め、第1セッションでは日本の事例紹介、第2セッションではアジアの各国から報告がなされた。これらを受けた第3セッションでは非常に活発な総合討論が行われたが、これについては後述する。

CBD 関連会議 CBD-COP10 (生物多様性条約第10回締約国会議) が2010年10月に名古屋で開催された。この会議ではいわゆる愛知目標が決定され、これを機会に日本でも生物多様性や海洋保護区 (MPA: Marine Protected Area) に関する論議が盛んになったことはよく知られている。この COP10 では多くの *Satoumi* 関連イベントが催され、またこれを契機として *Satoumi* をテーマにした CBD Technical series (2011)³⁾ が刊行されることとなった。前記の表現事例5はこの中にある。関連した論議の中から *Satoumi* を active conservation (積極的な保全) として位置づける考え方も整理された (Berque and Matsuda)⁴⁾

Satoyama-Satoumi Sub-Global Assessment (SGA) 国連主導のミレニアム生態系評価の地域版が SGA である。日本ではじめての SGA が里山、里海をテーマにして行われ、成果は *Satoyama-Satoumi and Human Well-Being* として出版された。²⁾ この中で、Seto Inland Sea as *Satoumi*⁵⁾ が評価された。*Satoyama* と *Satoumi* をつなぐ発想⁶⁾ は沿岸域の総合的管理 (ICM) にも通じている。

4. パラダイムシフトとしての *Satoumi*

西欧、特にアメリカを中心にして発展してきた自然の保護と利用を空間的に分離する考え方に対して、*Satoumi* は、里山のようにいわば保全しながら利用する考え方であるから、西欧流の沿岸域管理の考え方に新たな視野を与えたといえる。さらに、前述のマニラでの *Satoumi* Workshop (2009) の総合討論では新たな展開があった。バリ島などの「人間は自然の一部である」というヒンドゥー思想に基づく行動規範「トリ・ヒタ・カラナ」やフィリピンの伝統的持続的なマタウ漁業の紹介に触発されて、会場からは「パラダイムシフトやライフスタイルの変更が必要ではないか」という提案が出されるまでの論議となった。詳しくは拙著⁷⁾を参照していただ

きたいが、*Satoumi* に関する論議がここまで及んだことは *Satoumi* のもつ新たな萌芽的意味あいを示すものでもある。

5. まとめ

Satoumi が国際的にどのように捉えられているかは、これまで *Satoumi* がどのように発信されてきたか⁸⁾ にもよっている。しかし、現状で、*Satoumi* の捉えられ方を、端的、具体的に述べるのは極めて難しい。なぜならば、*Satoumi* は前述のように包括的概念規定として捉えられている側面が非常に強いからである。従って、ここでは *Satoumi* の総論的包括性についてまとめておきたい。その第1は沿岸域における保全と利用の調和、両立性である。*Satoumi* は完全保護区や no take zone のように保護一点張りでないが、利用中心の開発志向ではなく、地域の知恵や伝統を重視した自然再生や生態系管理を志向している。従って *Satoumi* は、CBM や EBM との親和性が強いのももちろんのこと、ICM や MPA ととも強い関係性を持っているのが特徴である。さらに最後に触れたように、国際的にはパラダイムシフトや新たなライフスタイルへの志向性を内包しているといえる。

文 献

- 1) Vierros M. Relevance of *Satoumi* to the CBD mandate. In: Secretariat of the Convention on Biological Diversity, *Biological and Cultural Diversity in Coastal Communities-Exploring the Potential of Satoumi for Implementing the Ecosystem Approach in the Japanese Archipelago*, (CBD Technical series 61), Montreal. 2011; 2-7.
- 2) Duraiappah AK, Nakamura K, Tekeuchi K, Watanabe M, Nishi M (eds). *Satoyama-Satoumi Ecosystems and Human Well-Being: Socio-Economic Production Landscapes of Japan*. United Nations University Press, Tokyo. 2012.
- 3) Secretariat of the Convention on Biological Diversity, *Biological and Cultural Diversity in Coastal Communities-Exploring the Potential of Satoumi for Implementing the Ecosystem Approach in the Japanese Archipelago*, (CBD Technical series 61), Montreal. 2011.
- 4) Berque J., Matsuda O. Coastal biodiversity management in Japanese *satoumi*. *Marine Policy* 2013; **39**: 191-200.
- 5) Matsuda O, Ebara A, Imai I, Inouchi Y, Ishikawa J, Kobayashi E, Terawaki T, Toda T., Tauchioka M, Ukita M, Yamashita Y, Yanagi T, Yuasa I, Zenitani H. Western Japan cluster: Seto Inland Sea as *Satoumi*. In: Duraiappah AK, Nakamura K, Tekeuchi K, Watanabe M, Nishi M (eds). *Satoyama-Satoumi Ecosystems and Human Well-Being: Socio-Economic Production Landscapes of Japan*. United Nations University Press, Tokyo. 2012; 381-402.
- 6) Matsuda O. Combining Activities of Sato-Umi and Sato-Yama in Japan: Towards a New Type of Integrated Coastal Watershed Management. In Taniguchi M., Shiraiwa T. (eds). *The Dilemma of Boundaries*, Springer, Tokyo, 2012; 211-220.
- 7) 松田 治. アジアで深まる Sato-Umi (里海) の認識. *アクアネット* 2010; **3**: 72-77.
- 8) 松田 治. “Sato-Umi” (里海) の国際発信. 『『里海』としての沿岸域の新たな利用』(山本民次編) 恒星社厚生閣, 東京. 2010; 102-118.